国際交流事後活動ニュース

MACROCOSM

◎特集　世界青年の船・東南アジア青年の船
速報　総務庁青年国際交流事業の募集について

マクロコズム 2000.3

vol.33

㈶青少年国際交流推進センター

第12回世界青年の船

～Sailing in Solidarity for a better World～

新生SWYとして出航した世界船12回は、実施時期が従来の1月から9月へ、参加国も東西混合乗船、それに伴う国数の増加、そして東ア船との連結と大きく内容を変更しました。その中で生れた数々のドラマ。これからの12回生の活躍が楽しみです。

〈参加国〉オーストラリア、バーレーン、ベルギー、カナダ、エジプト、インド、メキシコ、ノルウェー、ペルー、カタール、セイシェル、南アフリカ、スペイン、トルコ、アラブ首長国連邦、タンザニア、日本（計17か国）

▼ スポーツデッキで全員集合

▲ 勇壮な和太鼓演奏

▼ 世界船史初！東西参加国パフォーマンス
南アフリカ

▲ メキシコ

▲ スポーツレクリエーションデイでの一コマ

▲ 南アフリカの黒人居住区で

◀ アラブ首長国連邦青年教育大臣を表敬した林管理官

▲ タンザニアの盲学校で

◀ ex-PYとの合同会議（南アフリカ）

▼ 事後活動について真剣に話し合う

第1回「ワールドユースミーティング」開催!!

1999年10月30日

世界船・東ア船の事業実施変更に伴い、連結地点となったシンガポールにおいて「ワールドユースミーティング」がにっぽん丸船上で開催されました。両事業のナショナルリーダーおよび東ア船の全参加青年を交えて、活発な意見交換が行われました。今後同じ船でつながる、事業を超えた幅広いネットワークの確立が期待されます。

▲ 史上初！世界船と東ア船の合同事業

▲ 国連ボランティア計画
シャロン・アラキジャ事務局長

▶ UAEのリーダーと談笑する東ア船の日本青年

▲ 世界船参加国の国旗の下で質問する東ア船の参加青年

記念すべき瞬間。
世界船・東ア船両事業のリーダーたち ▶

21世紀に向けてBon Voyage!!

第12回「世界青年の船」　岡本　麻里

超多忙な社会人生活にピリオドを打ち、私は1999年9月第12回「世界青年の船」に参加した。今までとは全く違う環境の中で、同年代や学生達に囲まれ、日本人とそして文化も宗教も違う世界16か国の青年達と共に笑って泣いた50日間は、私に多大な刺激を与えただけでなく、日本について世界について、そして自分自身についても新たな発見をする良い機会になった。

印象に残っていることを挙げるときりがない。グループのAGL（アシスタントグループリーダー）として各国の個性豊かなメンバーをまとめていく。リーダーシップの楽しさや難しさ。改めて日本の伝統文化の良さを見直すきっかけになった関西メンバーでの獅子舞。寄港地、南アフリカで出会った子供達が目を輝かせて言った言葉“Study is a key of life”。国連ボランティアの活動にも興味をもつことができたセミナーアシスタント。そして、国際問題からプライベートな話題まで、夜遅くまで語り明かした日々。決して楽しいことばかりではなく、色々と思い悩む節もあったが、今となっては全てが良い思い出であり、勉強になることが多かった。

船上生活をする上で感じたことといえば、OPY（外国青年）の時間の使い方と自己表現のうまさだろう。とにかく、ONとOFFのけじめがきちんとできている。みんな様々なミーティングで忙しいはずなのに、ホリデー（休日）やパーティーの時は思いっきり楽しむ。そして、自分自身をアピールする上手さという点においては、本当に学ぶことが多かった。各個人がそれぞれ得意分野や得意芸があり、それを嫌味なく上手にアピールしてコミュニケーションを図っていく。

そして、今回参加して得た一番の宝物は、やはり世界中の友達との「出会い」。“まりママ”として慕ってくれ、忘れられないお誕生日パーティーを開いてくれたグループのみんな。大阪弁で語り合った関西のみんな。帰国後、早速日本まで遊びに来てくれたOPYもいた。国境もなく、人種もなく、たとえどのような問題が起こっても、話し合いの解決方法がとられるという理想の国際社会が、船の中では存在した。今後、来る21世紀に向けてしっかりとこの素晴らしい経験を活かしていくことが、私たちの新たな長い航海となるだろう。

主な内容

第12回「世界青年の船」……5～6
ワールドユースミーティング……7
この人に聞きました……8～9
他団体紹介（Up with People）……10～11
全国大会報告……12～13
平成12年度総務庁青年国際交流事業募集について……14～15
第26回「東南アジア青年の船」……16～18
私の事後活動……19
インフォメーション……20

〈表紙の説明〉

アジア太平洋青年招へい事業1999より

第12回「世界青年の船」に乗船して

第8回世界船・第12回世界船SNL　木村　隆紀

あれから3年、いまふり返ってもまさか、社会人7年目の営業マンが2度目の「世界青年の船」（以下、世界船）に乗船できるとは夢にも思わなかった。しかも過去11回と大きく変化した世界船である。乗船前にどのようなSNL（サブナショナルリーダー）になろうかといろいろ考えた。取り立てて英語が出来る訳ではないし、履歴書にかけるような世界で通じる技能がある訳でもない。年齢も参加青年とほぼ同じである。

そんな中で自分自身の長所を総合的に判断した結果、物事が順調にいっているときには何もしないが、有事の時には縁の下の力持ちに、そして参加青年たちの精神的支えになれるような、いわゆる「なごみ」タイプのリーダーを目指そうと思った。逆に短所としては物事を抱え込み過ぎる点が挙げられるので、今回は問題が発生するまでは「動かざること山の如し」、問題が発生したら「疾き事風の如し」をテーマに動いてみようかなと考えた。

総合的に見た自己評価は前半A、中盤B、終盤Bだった。この評価は私自身が主に参加青年や管理部が「SNLに何を望むか」ということを中心に考えて出した結果である。NL会議は多忙で疲れたが、皆で遅刻者やセクシャルハラスメントの議論を行い、その過程でNLと友情が深まり、同志のようになったのは私にとって財産になった。

いろいろと反省点はある。参加青年と意図的に距離を置いた為、問題が発生した時でも、青年との対話が不足し、腹を割って話せず相談にものれなかったような気がした。SNLとしてNLをサポート出来たかも少々不安が残る。多忙ゆえ、NLとのコミュニケーションが不足していた事も挙げられる。

更に、自分の世界船での居場所はNLではなく、船上唯一のSNL立場であり、最後まで自分の役割を見つけ出すことが出来なかったような気がする。その為、管理部の皆さんに対しても、日本参加青年にも、外国参加青年にも、外国のNLにも、日本のNL、ANL（アシスタントナショナルリーダー）にも自分の役割を伝えられなかったのではないか。強いて言うならば、管理部の立場にかなり近いポジションを演じていたかもしれない。

さて今回の事業参加が終わり、あらためて自分が2度目の、しかも転換期の世界船に乗船できた事を幸運に思う。第12回から始まったこの新形式での事業初期でしか感じられない、先駆者のみが知ることが出来る不安を感じ、乗り越えるまでの精神的なタフネスさを味わえたことは良い経験だった。それとともに、今後の「世界青年の船」事業の発展の中で、事業全体のコンセプトと方針、具体的な目的、それを実行するまでの手段、参加青年への配慮、事後活動への流れがより改善されていく事も切に願う。

最後になったが、今回の事業において他国が個々の個性で流れを掴む傾向があるのに対し、日本人参加青年が集団、仲間で結束して主張する日本人の得意とする自己表現方法を駆使し世界船上を盛り上げ、自分たちの色を出したことも皆さんに伝えておきたい。この素晴らしい仲間達に会えたのは幸せであり、私の一生の財産になるであろう。

ワールドユースミーティングを振り返って

第8回世界船・第26回東ア船管理部他　亀井　亜紀子

'99年10月30日、「ワールドユースミーティング」がシンガポール停泊中のにっぽん丸船内にて開催された。会議には「東南アジア青年の船」（以下東ア船）の全参加青年と世界青年の船（以下世界船）のナショナルリーダー（以下NL）達が参加し、共通テーマについて意見交換をした。

この会議は両事業の実施時期の変更に伴って今年から開催が可能になったもので、姉妹事業の参加青年が初めて接点を持ったという意味で画期的な企画だった。しかし、初回だけになかなか会議のイメージが掴めず、手探り状態での準備が続いた。総務事務次官の挨拶や、国連ボランティア計画事務局長のシャロン・アラキジャ氏の基調講演等、大筋では青少年対策本部の世界船担当が枠組みを作ったが、会議の運営方法や時間配分については船内でNL会議の協力を得て具体化していった。

特に難しかった点は、両事業からの参加人数があまりに違い過ぎることである。会議は両事業のNLによる共通テーマの理解と意見交換という趣旨で開催されたが、300人近い東ア船の参加青年を会場で傍観者にしてしまうことにはNLも消極的だった。一方、300人対10数人では議論を交わすわけにもいかず頭を悩ませた。

結局「ボランティア」をテーマにした質疑応答という形に収まり、本番では多くの東ア船参加青年が世界船のNLに対し、各国のボランティア情勢について活発に質問した。また世界船のNL達は船内でのディスカッションや、現役の国連ボランティアスタッフ2名を講師に迎えて行われた「ボランティアウィーク」について、用意した資料をスクリーンに映しながら発表した。更に、どのような環境で話し合われたのかを伝え、世界船事業そのものを理解してもらうために活動ビデオを8分に編集し上映した。進行役は世界船NL2名が務め、質問を促す等、会議全体を盛り上げてくれ、終始和やかなムードで進行した。国連関連の質問についてはアラキジャ氏へ直接伺い、的確な回答をいただいた。

今年から東西の参加国を組み合わせて始まった新しい世界船に、アジアの青年が加わったことで、この会議は文字通り「ワールドユースミーティング」にふさわしいものになったと思う。

会議終了後、記念撮影をしている両事業のNL達、そして参加青年と住所交換をする彼らの姿を見て、何かとても温かいものを感じた。「にっぽん丸」のデッキに並べて掲げられた両事業の横断幕を感慨深く見上げ、会議が成功したという充実感と船を仲間に引き継いだ喜びを胸に、にっぽん丸を後にした。21世紀に向けて「ワールドユースミーティング」が両事業の参加青年を刺激し合えるような形に発展していくことを願っている。

◀全員が既参加青年（世界船8回生）。（左から）ノルウェーNL、東ア渉外青年、世界船管理部（筆者）

特別企画「この人に聞きました」

世界に広げる ひと折りの心

おりがみ会館館長
小林　一夫

Q：折り紙を始めたきっかけは？

「ゆしまの小林」という和紙の老舗の4代目だから、生まれた時から和紙に囲まれて育ちました。小学生の時から将来は稼業を継ぐと言っていましたからね。でも折り紙そのものに力を入れ始めたのは30年前ぐらいからです。紙を売るには折り紙の作り手を増やさなければと思って、教室を始めたのがきっかけでした。それまでは鶴すら折ることができなかったほどだったんですよ。

Q：折り紙の由来は？

「紙」そのものは6世紀頃に中国から入ってきたと言われています。でも、折り紙ができるような薄い紙は、日本で作られたものだと思います。もちろん折り紙そのものの技術も日本が発祥ですね。だから折り紙は日本が誇れる伝統文化です。

もともと昔から日本では、五穀豊穣を願う時に、お供え物の下に紙を敷く習慣がありました。その時にただ一枚置くのではなく、「ひと折り」していたわけです。今でも天ぷらを置く紙はその折り方でその店の格がわかります。また、かつては人に物やお金を渡す時は紙で包むという習慣がありました。お祝い事で近所に赤飯を配るときには、小さく切った白い紙を折って、ごま塩を包んで南天の葉の上に添えたり、来客のご馳走の割り箸を美しく包んで、もてなしの心を表現しました。お金を包むときは、目的によって包み方を変えるなど親から子へと自然に教えられたものでした。

このような包み方が進歩していったものが折り紙だと思います。ひと折りすることでその人の心が入る。世阿弥の花伝書にある「心より形、形より心に移る」ということですね。

以前ベストセラーになったアルビン・トフラーの『第三の波』にあるコンピュータの時代に、今私達は生きていると思います。でもその世界にも限界がある。そして第四の波として考えられるのが「心の時代」だと感じています。そう

いう意味では、心を折る折り紙はまだまだこれから発展していくものだと信じています。

Q：国際交流の場面でも折り紙は大人気のようですね。

最近、青年海外協力隊をはじめ国際関係の場で折り紙を教えることが多いんですね。また私自身が海外に出向くことも増えてきました。今年は4月にベルギー、5月はドイツで展覧会を開く予定です。これに合わせてインターネットで呼びかけて作品を集め、この展覧会の場で展示しようと企画しています。世界の折り紙人口ははっきりわかりませんが、このようにして呼びかけると各国から反応はあるのですよ。折り紙でつながっているネットワークはうれしいですよね。

また国内外のパーティーでも、リバーシブルの紙一枚をしのばせておくと、人気者です。なぜなら金と緑ならばエメラルド、赤ならルビーの豪華な指輪をあっという間に作って、プレゼントしてしまうのですから。以前に招待された駐日韓国大使の歓送会でスピーチをした時、韓国の特産ヒスイと以前は日本にもたくさんあった金を模して、友好の指輪を作って大使に贈ったところ、大変感激してくださいました。

皆さんにも喜ばれ、私も「モテ男」になれるのですから、折り紙は止められないですネ（笑）。

Q：これからの展望は？

私は伝統は守っていくのではなく、育てることによって残っていくものだと思っています。伝統をふまえながら革新していく姿勢は大事にしていきたいですね。

また、先ほど「心の時代」がきていると言いましたが、こうした時代の移り変わりを正確に把握するには、物事の本質を見極めること、真実は何かを問いつづける態度が必要不可欠だと思います。真実は現実の中にしかない。学者の中には風化したものを研究する曖昧さがあるけど、私は実際に目に見える現実を伝えていきたいと思っています。

そんな気持ちを大事にしていきながら、一人でも多くの人と出会い、折り紙の素晴らしさを分かち合いたいですね。

小林 一夫氏のプロフィール

小林 一夫（こばやし かずお）

1941年東京生れ。和紙の老舗「ゆしまの小林」の後継者として染色技術や折り紙など和紙に関わる伝統技術・文化の普及に尽力。アジア・欧米諸国で折り紙の展示・講演活動を行う。1985年大韓民国社会教育文化賞受賞。現在、「ゆしまの小林」社長、全日本紙人形協会会長を務める。また山村国際高等学校、海外青年協力隊、日本製菓学校、各種カルチャースクールの講師としても活躍。

著書に『ORIGAMI PARTY』（講談社）『ドラえもんと折り紙』（小学館）『冠婚葬祭折り紙』（日本ヴォーグ社）をはじめ他多数。

ミュージカルで世界をつなげ!
～ Up with People ～

このマクロコズムでは、"Up with People" を創刊号でも紹介しています。㈶青少年国際交流推進センターが設立されたのと同じ頃にこちらの日本事務所も本格的活動が始められ、その後、大きな成長を遂げています。今回は、日本オフィスにうかがってディレクターの冨田さんとアドミッション担当の田中さんにお話を伺いました。冨田さんは、会社員からこのお仕事に転身、田中さんは、"Up with People" の 10 年前の参加者で昨年からのスタッフです。

▲ 日本オフィスのスタッフ。開設当時からのスタッフである宮脇さんが外出中だったのは少々残念でした

"Up with People" とは、どのような団体なのですか？

田中："Up with People" とは、アメリカ合衆国コロラド州のデンバー郊外に本部を置く非営利の国際教育団体です。18 歳から 28 歳までの若者が 1 年間生活を共にしながら世界各地を訪問し、いろいろな文化・生活様式を体験するプログラムを推進しています。発足以来、世界 92 か国より、20,000 人近い若者が参加しており、日本人参加者も 300 人に及んでいます。

具体的活動はどのようなものですか？

田中：20 数か国から集まる約 130 人の若者たちを 1 グループとして、1 年間で世界約 5 万キロを旅しながら共に学び、さまざまな活動を行います。地域活動、ミュージカル公演、ホームステイなどを通じて各地の人々との異文化交流をはかります。

日本での組織は、どのようになっているのですか？

冨田：日本では、1993 年から「日本オフィス」を開設し本格的活動が始まりました。

多くの企業などの賛同を得て、「アップウィズピープル日本委員会」が組織され、多くのボランティアの皆さんに支えられて、地域に

おける受入れ活動によって日本でのプログラムが実施されています。昨年10月から12月の日本プログラムでは本当に多くの方のご協力で無事に成功させることができました。

昨年の日本での活動はどのような様子でしたか？

田中：10月4日から12月13日までの70日間、世界24か国124 名の若者たちが日本各地を訪問するUp with People "ふれあいツアー'99" を実施しました。1996年以来連続4回目となる今回は、訪問順に奈良県奈良市、長野県小諸市、長野県丸子町、東京都、京都府、愛知県豊田市、長崎県、熊本市、熊本県荒尾市の9か所を訪問しました。

各地で、ホームステイ、学校や福祉施設への訪問と交流、ミュージカル "ROADS" の12回の公演を含めた様々なイベント実施、地域学習など計133か所での様々な活動を行いました。

このプログラムの参加者に求められる資質とはどのようなことなのでしょうか。募集は？

田中：何よりもオープンマインドと体力です。心を開いてだれとでもコミュニケーションしようとする精神と十分な体力がなければ、1年間のプログラムを終了することはできません。参加者には、プログラムへの100%参加が条件とされます。

常に前進できる精神が求められます。毎年1月から1年間と7月から1年間の2回プログラムを実施していますが、2年先のものから受付を始め、そして3か月前まで受け付けています。参加費用は、約160万円です。興味のある方はぜひご連絡下さい。詳細資料をお送りします。

こうした活動のスタッフをしていらして、最も充実感を感じるのはどのようなところですか？また、苦しいときは？

田中：自分の全身全霊を傾けられる素晴らしさと参加青年の成長の変化を目の当たりにしたときです。また、苦しいのは人間関係の間に入ってしまったときでしょうか。

冨田：同感ですね。それから、人が人を育てていく、互いに学び合うということに素晴らしさを感じますね。

最後に、今年の活動の新しいチャレンジはどのようなことを目指していらっしゃいますか？

冨田：日本での受入れ地域を東北・北海道地域にも展開していけたらと考えています。受入れについて興味がある地域の関係者の方からのお問い合わせをいただければ幸いです。

ありがとうございました。

9月号では、今年の日本プログラムについてと青年たちの具体的な活動について掲載する予定です。

〔日本オフィス〕
150-0012　東京都渋谷区広尾2－15－9
TEL. 03－3400－7495
FAX. 03－3400－7496
ホームページ
http://www.upwithpeoplejapan.gr.jp
e-mail:uwpjapan@japan.upwithpeople.org

全国大会岐阜大会を担当して

広報担当　斎藤　博子

IYEO会員のすべての方々にお勧めします。もし、まだ「全国大会」に参加されてなかったら、是非一度、参加してみてください。そしてできれば、実行委員になってみてください。きっと「やってよかった」「行ってよかった」と思えることでしょう。

私が実行委員になった動機は、ただ「ご恩返しのつもり」でした。平成10年10月25日（日）岐阜市長良川スポーツプラザで第1回実行委員会が開催されましたが、出席したのは、わずか10名でした。私の住む高山市から岐阜市までは、中田副実行委員長の住む清見村～せせらぎ街道～郡上～長良川添いに日本の本当のまん真ん中の南並村を経て、車で片道2時間30分かかります。せせらぎ街道の美しい四季の移り変わりを見ながら、会議に出席できたのは、毎回、車を運転してくれた企画担当の平田さんのおかげです。飛騨地区の3人が回は違うけれど、共に青年の船の団員だった事も幸いしたと思います。

大会直前11月28日の実行委員会は、初雪の降った日にありました。往復の車のなかで、いろいろなアイデアが生まれ、意見交換ができました。実行委員会は、集まりやすい美濃市でもありました。「岐阜へ来てよかった」と言われるような、そして「私達実行委員も楽しめるような」大会にしたいと東濃、西濃、南濃、岐阜各地から集まった実行委員は、当日は26人にもなりました。実行委員の一体感は、前日から盛り上がり、私が30年前に経験した「第2回青年の船」の気分がよみがえったようでした。若い人達はどうかわかりませんが、20代～60代までの委員の間に少しも違和感がなかったように思います。

私の担当の広報は、大会資料、報告書の作成が主な仕事です。報告書ができあがってやっと終了となります。今回担当してみて、形が残る印刷に関する仕事は大変だということがよくわかりました。

まず、マクロコズム9月号に載せた大会の問合先で、私のe-mailアドレスが1字間違っていた事。「郵便なら、一字間違っていても届くのに」と思う人にはこれからは厳しい時代になりそうです。兵庫IYEOの事務局員のKentaさんに電話をいただくまで気がつきませんでした。とはいうもの、e-mailは本当に便利です。この大会を通じて、必要に迫られパソコン操作が上達したように思います。アドレスに限らず、印刷する情報、文面は出来る限り慎重に、正しく、できれば複数で一字一句チェックが必要だと実感しました。

◀実行委員の皆さん、お疲れ様でした

参加して下さった皆さん、そして実行委員のおかげで岐阜大会は、無事終了しましたが、「IYEO：日本青年国際交流機構」は、終身制です。「口は出さずに会費さえ出せばいい」と言われても、私にできる事がある限り、いくつになっても、IYEOの一員として、平和な世界につながる活動をしていきたいと思います。

「いまから ここから 全国大会岐阜大会から」です。

◀ ベマ・ギャルポ先生のシャープな切り口の講演は、聞きごたえがありました

▲ 参加者集合（懇親会会場にて）

総務庁青年国際交流事業の参加青年募集

総務庁の行う青年国際交流事業は、日本と諸外国の青年の交流を通し、相互の友好と理解を促進し、広い国際的視野と国際協力の精神を有する次代を担うにふさわしい青年の育成を目指しています。

全国の青年の皆さんが、この事業に積極的に参加し、帰国後もその経験をいかして地域、職域、学校又は青少年団体等において国際交流活動、青少年活動などを活発に行い、社会に貢献されることを期待しています。

平成12年度の事業概要、応募資格等は次表のとおりです。

<table>
<tr><th colspan="2"></th><th colspan="3">航空機による青年の海外派遣</th><th>世界青年の船</th><th>東南アジア青年の船</th></tr>
<tr><td colspan="2">訪問国等</td><td>オーストリア、ブラジル、デンマーク、フィンランド、ジョルダン、タイ、ジンバブエ（うち1か国）</td><td>中国</td><td>韓国</td><td>ロシア（ウラジオストク）、アメリカ合衆国（ホノルル）、フィジー、ニュー・ジーランド
［オセアニア、中近東、アフリカ、ヨーロッパ、北米、中米、南米等地域の外国青年約150人と共に船内で共同生活をしながら各国を訪問］</td><td>シンガポール、インドネシア、マレイシア、タイ、ヴィエトナム、ブルネイ、フィリピン
［東南アジア10か国［ラオス、ミャンマー、カンボディアを含む］の青年約300人と共に船内で共同生活をしながら各国を訪問］</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">実施時期（期間）</td><td colspan="3">平成12年9月～10月</td><td>平成12年9月～10月</td><td>平成12年10月～12月</td></tr>
<tr><td>4週間程度</td><td>3週間程度</td><td>15日間程度</td><td>50日間程度</td><td>50日間程度</td></tr>
<tr><td colspan="2">募集人員</td><td>各約8人</td><td colspan="2">一般団員：中国　約25人
韓国　約35人
涉外団員：各2人</td><td>約120人</td><td>約40人</td></tr>
<tr><td rowspan="4">資格要件</td><td>年齢</td><td>18歳～30歳
（昭和44年4月2日～昭和57年4月1日に出生）</td><td colspan="2">一般団員：18歳～30歳
（昭和44年4月2日～昭和57年4月1日に出生）
涉外団員：概ね25歳～35歳</td><td>18歳～30歳
（昭和44年4月2日～昭和57年4月1日に出生）</td><td>18歳～30歳
（昭和44年4月2日～昭和57年4月1日に出生）</td></tr>
<tr><td>青少年活動等</td><td colspan="5">帰国後もその経験をいかして国際交流活動、青少年活動等を活発に行える者</td></tr>
<tr><td>語学力等</td><td>一般的な教養があり、交流活動を円滑に行える英語力を有すること。</td><td colspan="2">訪問国の公用語による簡単な日常会話能力があれば望ましい。
涉外団員：訪問国の公用語で任務を遂行できること。</td><td colspan="2">一般的な教養があり、交流活動を円滑に行える英語力を有すること。</td></tr>
<tr><td>その他</td><td colspan="5">国の行う同種の事業に参加したことのある者は応募できません（ただし、涉外団員への応募はこの限りではない）。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">研修</td><td>事前</td><td colspan="3">7月下旬の約5日間</td><td>7月上旬の約5日間</td><td>8月下旬の約6日間</td></tr>
<tr><td>出発前</td><td colspan="3">出発直前の約2日間</td><td>出航直前の約3日間</td><td>出発直前の約3日間</td></tr>
<tr><td>帰国後</td><td colspan="3">帰国直後の約2日間</td><td>帰国直後の約2日間</td><td>日本国内活動直後の約2日間</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">個人負担額</td><td colspan="3">約7万円</td><td>約30万円</td><td>約30万円</td></tr>
<tr><td colspan="5">〔内訳〕研修費（事前、出発前、帰国後）、片道航空運賃及び食費（船事業のみ）、渡航手続費用、旅行保険料等
（上京・帰郷旅費等は、別途負担となります。）</td></tr>
</table>

総務庁青少年対策本部

〒100-8905　東京都千代田区霞が関3－1－1 ☎(03)3581－2196（月～金 9:30～17:45）

ホームページ：http://www.somucho.go.jp/

平成12年度事業日本参加青年募集担当都道府県主管課一覧

都道府県		主管課名	電話番号	募集期間	中間選考日
1	北海道	総務部知事室国際課 環境生活部文化・青少年室（国際青年の村のみ）	011-231-4111（内21-215） 011-231-4111（内24-511）	3／1～4／3	書類選考
2	青森県	環境生活部青少年課	0177-34-9225（直通）	3／6～4／4	4／18
3	岩手県	生活環境部青少年女性課	019-651-3111（内2771）	3／1～4／10	4／21
4	宮城県	教育庁生涯学習課	022-211-3654（直通）	3／1～3／31	4／14
5	秋田県	生活環境部青少年女性課	018-860-1552（直通）	3／13～4／7	4／17
6	山形県	文化環境部県民生活女性課青少年女性室	023-630-2101（直通）	3／6～4／6	4／19
7	福島県	生活環境部青少年女性課	024-521-7187（直通）	3／6～4／7	4／20
8	茨城県	知事公室女性青少年課	029-301-2183（直通）	3／1～3／31	4／21
9	栃木県	生活環境部女性青少年課	028-623-3075（直通）	3／1～3／27	4／18
10	群馬県	教育委員会事務局文化スポーツ部青少年課	027-226-4674（直通）	3／1～3／31	4／11
11	埼玉県	環境生活部青少年課	048-830-2912（直通）	3／6～3／24	4／14
12	千葉県	社会部青少年女性課	043-223-2396（直通）	3／1～3／30	4／18
13	東京都	教育庁生涯学習部社会教育課 生活文化局女性青少年部青少年課（国際青年の村のみ）	03-5321-1111（内54-433） 03-5321-1111（内29-532）	3／1～3／22(郵送) 3／22～3／23(窓口)	4／9
14	神奈川県	県民部青少年課	045-210-1111（内3845）	3／1～3／24	4／16
15	新潟県	福祉保健部児童家庭課	025-285-5511（内2512）	2／24～3／29	4／17
16	山梨県	企画県民局青少年女性課	055-223-1357（直通）	3／15～4／17	書類選考
17	長野県	社会部青少年家庭課	026-232-0111（内2358）	3／3～4／5	書類選考
18	静岡県	教育委員会事務局青少年課	054-221-3311（直通）	3／1～3／31	4／14
19	富山県	生活環境部女性青少年課	076-444-3136（直通）	2／23～3／27	4／20
20	石川県	県民文化局女性青少年課	076-223-9112（直通）	3／14～4／14	4／23
21	福井県	県民生活部青少年女性課	0776-20-0297（直通）	3／1～4／7	4／17
22	愛知県	総務部青少年女性室	052-961-2111（内2354）	3／1～3／27	書類選考
23	三重県	生活部青少年私学課	059-224-2404（直通）	3／1～3／31	4／12
24	岐阜県	地域県民部青少年課	058-272-1111（内2422）	2／21～3／24	4／11
25	滋賀県	教育委員会事務局生涯学習課青少年対策室	077-528-4660（直通）	3／6～4／7	4／23
26	京都府	府民労働部青少年課	075-414-4306（直通）	3／6～3／31	4／13
27	大阪府	生活文化部スポーツ・青少年課	06-6941-0351（内4844）	2／21～3／22	4／6
28	兵庫県	生活文化部こころ豊かな人づくり推進課 ㈶兵庫県青少年本部事業推進部	078-362-3143（直通） 078-360-8581（直通）	3／1～3／21	4／18
29	奈良県	生活環境部青少年課	0742-22-1101（内3345）	3／1～4／7	書類選考
30	和歌山県	生活文化部青少年課	073-441-2503（直通）	3／6～3／31	4／16
31	鳥取県	企画部女性青少年課	0857-26-7076（直通）	3／11～4／12	書類選考
32	島根県	健康福祉部青少年家庭課	0852-22-6524（直通）	3／1～3／29	4／14
33	岡山県	生活環境部女性青少年対策室青少年課	086-224-2111（内2543）	3／1～3／31	4／14
34	広島県	県民生活部青少年女性課	082-228-9335（直通）	3／1～3／31	4／13
35	山口県	環境生活部女性青少年課	083-933-2634（直通）	3／1～3／29	4／12
36	徳島県	企画調整部青少年室	088-621-2176（直通）	3／1～3／31	4／9
37	香川県	生活環境部青少年女性課	087-831-1111（内2814）	3／1～4／7	4／23
38	愛媛県	保健福祉部児童福祉課	089-941-3434（直通）	3／1～4／3	4／20
39	高知県	文化環境部国際交流課 健康福祉部こども課（国際青年の村のみ）	088-823-9605（直通） 088-823-9637（直通）	3／1～3／31	4／12
40	福岡県	環境生活部県民生活局青少年課	092-641-4740（直通）	3／1～3／31	4／19
41	佐賀県	福祉保健環境部児童青少年課	0952-25-7055（直通）	3／6～4／7	4／20
42	長崎県	教育庁生涯学習課	095-824-1111（内3366）	3／10～4／7	4／14
43	熊本県	環境生活部県民生活総室	096-383-1111（内7408）	3／13～4／7	4／14
44	大分県	生活環境部女性青少年課	097-536-1111（内3045）	3／1～4／7	4／21
45	宮崎県	生活環境部女性青少年課	0985-26-7041（直通）	3／1～3／31	4／10～14
46	鹿児島県	環境生活部青少年女性課	099-286-2554（直通）	3／1～4／7	4／19
47	沖縄県	文化環境部青少年・交通安全課	098-866-2182～84（直通）	3／1～4／9	4／19

※都道府県レベルでの試験方法、手続きは異なりますので、受験該当地で確認して下さい。
※国際青年の村は、募集期間が異なります。

東南アジアの風

第26回「東南アジア青年の船」　長谷川　知

「にっぽん丸」での生活はまさに人世の縮図であったように思う。人それぞれの生き様がそこに展開され、一生とは何かと考えさせられた。晴海に到着する前日にシンガポール青年の二人が日本青年の重い荷物を運ぶ手伝いをしてくれた。その時「ちょっとまてよ。この荷物を前に運んだことがある。結局初めと終わりは同じことをしている。」と、その二人は私に話しかけてカラカラと笑った。なんて愉快な人達と出会えたのだろうと心の底より思えた。にっぽん丸は輝く思い出達がたくさん詰まった宝箱であり、本当に不思議な空間であった。

デッキで感じていたあの強い潮風が「東南アジアの風」に思えてならない。私は「風」という一文字が好きである。風は自由であり時には運命となって人に吹くものではないだろうか。このプログラムを通じて私に三つ運命の風が吹いた。一つ目の風は約三年前に東南アジアを旅することができたことであり、二つ目の風は「東南アジア青年の船」参加募集のポスターに偶然出会ったことで、三つ目の風はユースリーダーとしてこのプログラムに臨んだことである。プログラム中は自分のことで精一杯で余裕がなく、思いやりの足りなさから人を傷つけていたかも知れないし、かつて気ままにアジアを旅した思い出とこのプログラムを比べて窮屈な気分になることもあった。リーダーとしての私は未熟な存在で、自分一人の力ではリーダーとして頑張ることもこのプログラムを楽しむこともできなかった。私は本当に素晴らしい人達に出会い、支えられ、たくさんのことを教えていただいた。感謝の言葉が見つからない。

「JAPAN DAY」の背景画には葛飾北斎の「富嶽三十六景 神奈川浪沖裏」を選んだ。以前は何とも思わなかったこの絵画が、今は別の視点で鑑賞できるようになった。北斎はこの絵画の中に何を表現したのだろう。私は人生だと思えた。この絵画の中に三つのものが見えてくる。今まさに三艘の舟を飲込もうとする荒波、阿吽の呼吸でその荒波を乗り越えようとする船乗り達、遠くには富士が見える。荒波は人生においての困難と苦しさであり、船乗り達は必死に生きる人間の姿で、富士は一つの終着点なのであろう。荒波があるからこそ人生は面白いのではないだろうか。何でも思いどおりにできたら人間は生きる意味を失ってしまう。たとえ荒波に飲込まれたとしても前向きに歩き続けることが大切で楽しいのだと私は思う。私は「東南アジア青年の船」という偉大な経験を誇りにしている。このプログラムによって「東南アジア」がもっと近くなり、人間がまた好きになれた。この経験をこれからの人世に活かせるように、何かに挑戦し何かを創造していきたい。

二つの「船」と仲間たち

第7回世界船・第26回東ア船　上森　奈穂美

約50日に亘る2度目の「船」もあっと言う間に終わってしまった。5年前の今ごろ、私は、第7回「世界青年の船」に参加するための準備で大忙しだった。国際交流の経験もあまりなく、不安をたくさん抱えての乗船。正直言って、プログラムの間は一体どうしたらいいのか、右も左もわからないまま2ヶ月が終わってしまった。下船後、このままではもったいないと思い、いろいろなプログラムに参加するようになり、IYEOでの事後活動を通して全国各地に知合いができた。そして、昨年3月「東南アジア青年の船」で渉外青年を募集していることを知った。世界船の時から比べて自分は成長しているのだろうか、そんなことを考えながらの応募、そして参加だった。今回の「東南アジア青年の船」は「にっぽん丸」という共通項はあるものの、世界船とは違うことばかりでとても新鮮な気持ちで毎日を過ごした。参加青年達との交流だけではなく、各国での表敬訪問、ホストファミリーとの出会い、別れ。いろいろな人種・宗教・文化がありながら、アジアという共通項で結ばれている私達。なぜだかわからないけど、最初から安心感があった。

世界船参加後に「何か日本文化を」と思って始めた着付けとYOSAKOIソーランも、今回いろいろな場面で披露することができたが、私自身5年前と変わっていない、まだまだと思う場面もたくさんあった。

「渉外青年って何するの？」とよく聞かれる。管理部と参加青年の調整役という役割があるものの、むしろ事前研修中、プログラム中を通して「経験者」ということで頼りにされたり相談を受けることが多かった。参加青年に「世界船の時はどうだったの？」と聞かれることもあったし、「世界船の時はこうだった」と考えてしまうこともあった。しかし、これは第26回「東南アジア青年の船」の参加青年達で作り上げるプログラム。過去にとらわれすぎず、でも必要な時に的確なアドバイスをできるような能力が必要であると強く感じた。私が渉外青年としてどれだけ期待に応えられたかわからないが、他の参加青年とはちょっと違った目でいろいろな場面を見ていたことは確かだ。

外国人参加青年は成田空港からそれぞれの母国へと帰っていった。約2ヶ月、いつも誰かが側にいたことを思うととても寂しい。特に仲が良かった友達とは、顔を見ただけでお互い何も言わず涙がこぼれてしまった。でも、今の私にはいわゆる“SSEAYP SICK”はない。これがほんの始まりだということがわかっているからだ。私には二つの船で得た友人がいる。この素敵な出会いと経験を活かして、一体何ができるのかと今考えている。

「東南アジア青年の船」に参加して

第26回「東南アジア青年の船」　田中　明人

約２ヶ月に及ぶ国境を越えたアセアン青年との共同生活を通して、アセアン諸国にこれほどまで大きな「友情の輪」ができたことは僕にとって一番の大きな収穫であると言っても過言ではない。

プログラム期間中、幾度となくアセアン青年と互いの悩みを打ち明け、時には共に泣いて分かち合うこともあった。彼らと肩を組み、共に手を叩いて一緒に歌い、声援を送りあうこともあった。討論になり、お互いの感情をぶつけあうこともあった。そして気が付くと、僕達参加青年の間には国境を越えた厚い友情が生れていた。２ヶ月前、全く知らなかった彼らが今ではかけがえのない仲間になっている。日本やアセアン諸国といったどこの国で生れ育ってきたかに関係なく、同じ「人間」として協力し合い、お互いが違う国に住む存在なのではなく、常にこころの中で共存し、何かあったら協力し合うことができる。そう心から思える「仲間」になっている。お互いに築き上げた友情と最高の思い出は、これからの財産となり永遠に残るであろう。

このプログラムを通して、強く実感したもの、それは一言で言えば「つながりあった命」である。「生きている」ということにあいて僕達は一体であり、実は深くつながりあっているという感覚、それぞれが生まれ育った国は違っても、全く違う生活習慣をもっているとしても、「生きている」というだけでお互い計り知れないほど多くのものを共有しているということだ。そう思うと、普段巨大なものとして認識している「地球」が、なんだか小さく思えた。

プログラムが終了した今、彼らそれぞれに別々の道がある。もう、あの共同生活に戻れないのかと思うと心から寂しく思う。しかし、彼らそれぞれに別々の道があるように、僕にも同様なことが言える。これから大切なことは、いかにしてこの体験をばねにして次に活かしていくかだと思う。その活かし方は人それぞれだが、民主主義や人権、人間らしい生活などについて多くの人が共通の考えをもってきている中で、今のように恵まれた境遇にいるときこそ、自分だけの幸せに安住するのではなく、「これでいいのか」と問う精神を持ち続けたいと僕は考えている。

人生に定年はないと考える以上、そしてこれから先、地球的な視野をもって世界の平和と人類の福祉に大いに貢献していくためにも、年を重ねていっても情熱と行動力溢れる人間でありたい。そして生きている限り、人のため、社会のために役立ちたいという強い願いをもって、たった一度の人生を一歩一歩進んでいきたいと思う。こんなことを思わせてくれるプログラムだった。

◀マレイシアの民族衣装を着て（筆者中央）

記念パーティーのススメ

第2回「世界青年の船」　椿　景子

90年代最初に乗船した第2回「世界青年の船」メンバーは新千年紀最初の年に10周年を迎えた。去る1月22日に東京で記念パーティーを開催し、指導官、管理部も合わせ、50人以上が集まり、懐かしい再会を果たした。

第2回世界船というと、先代にっぽん丸を使用した最後の代であり、また西側航路第1回目でもある。下船直後は何かと理由をつけては集まり、外国青年の来日も頻繁にあったが、いつの間にかそれぞれの時間が中心となり、世界船は「思い出」として心の奥底にしまいこまれていったように思う。今と違ってe-mailもなく、事後活動という言葉すら船上で語られたこともなく、下船してからの組織体制もしっかり作らなかったことから、今回のパーティー案内を出すにあたってかなりの不明者がいた。しかし、返信ハガキが手元に戻り始めた頃から、続々と今まで連絡が途絶えていた仲間の情報が入り、空欄だった住所録が埋まっていくのはうれしかった。

そして迎えた1月22日。会話をしながら相手の名前が思い出せないというのでは気まずかろうと、受付ではしっかり名札を用意した。が、そんな心配もよそに、皆さん全体的に大きくなってはいたものの、10年前とほとんど変わらず、空白の時間を埋めることは簡単だったように思う。当時学生だった人さえも、社会人として8年以上のキャリアがあり、社会人だった人に至っては、それぞれの職場で要職に就いている。指導官の先生方は、孫の話に花が咲くなど、時間の流れを実感するひとときだった。船内で夜を徹してこれからの人生について語り明かしたことが、現実になっていることを目の当たりにし、10年の月日の重みを感じた。

ところで世界船の第2回生は、しっかりとした事後活動のネットワークを作らずに下船したものの、その後団長2人、NL3人、管理部3人、各都道府県IYEO役員多数を輩出している代である。また「人生まるごと事後活動」に貢献(?)している船内カップルも国内外に多い。

今回のこの記念パーティーをきっかけに、久しぶりに息を吹き返した第2回生のネットワークを大事につなげていきたい。「今度の再会は10年後にしようか」と言った時、「それじゃ生誕半世紀になっちゃうよ」という声を聞き、次回の記念パーティーはもう少しスパンを短くして開催されそうだ。

節目を迎える年を控えている皆さん、ぜひ「○○周年記念パーティー」の開催をおススメしたい。再会の感動と、自分が経験したものの重さを改めて実感できる貴重な事後活動であることは間違いないようである。

著書紹介

ソウルはもう、お隣り気分

第21回「東南アジア青年の船」　亜州奈みづほ

かつては“近くて遠い国”と言われた韓国も、近年身近な存在となりつつある。韓国政府は昨秋から日本の大衆文化を段階的に開放するという政策を打ち出しており、日本にはそもそも流入禁止措置などないのだから、何の障害もなく文化交流を……と言いたいところだが、いまだに多くの日本の若者は韓国と言えばキムチとチマチョゴリ程度の知識しか持たないのが少々寂しい。

ある国にアプローチする場合、政治・経済等々、様々な視点が考えられるが、中でも私達がすぐに実践できるのは、やはり文化的なものではないかと思う。経済成長を遂げた都市ソウルに花開く現代文化は、民族性を重視するお国柄か、欧米のコピーにとどまらない適度なエスニック色を帯びており、私達日本人を魅きつける。例えばチマチョゴリ風ファッションモードや焼肉ピザ、フレーバー果実茶などなど。等身大のソウルの魅力を読者の皆さんにも体験していただければと、このほど『ソウルはもう、お隣り気分』という紀行エッセイを上梓した。そろそろ大韓民国を“近くて遠い国”ではなく、“真のお隣りさん”と呼ぶべき時期に来ているのかもしれない……とふと思った。

◀『ソウルはもう、お隣り気分』（大和出版　一、四〇〇円）

編集後記

公園を散歩していたら、いつの間にか木々に小さなつぼみがついているのに気が付きました。新しい葉や花を咲かせるための準備期間。年度の切替を目前に事務局も4月に向け、着々と準備をしています。来年度は何が起こるのやら、どんな出会いがあるのやら、密かに期待しています。

＊本誌の年間講読をご希望の方は、㈶青少年国際交流推進センターまで葉書又はＦＡＸにてお申込み下さい。年間講読料は1,500円です。

MACROCOSM（マクロコズム）　3月号　Vol.33　2000年3月1日発行（隔月発行）
編　集：マクロコズム編集委員会
発　行：財団法人　青少年国際交流推進センター
〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2－35－14
TEL　03－3249－0767
FAX　03－3639－2436
e-mail LDP04056@nifty.ne.jp
URL　http://www.iic.or.jp/iyeo
編集協力：総務庁青少年対策本部
日本青年国際交流機構
定　　価：198円（本体189円）
印 刷 所：株式会社　絢 文 社
TEL　03－3959－3960

第26回東南アジア青年の船

26年の実績を誇る東ア船は、その歴史の中で様々な発展を遂げてきました。今年度は、東京から参集地であるシンガポールまでの航海日がなくなり、新たな試みとして、世界船ナショナルリーダーとの合同事業である「ワールドユースミーティング」が開催されました。船上生活、ホームステイ等、どの場面でも最高の笑顔を見せてくれた26回生それぞれの今後の活躍を期待しています。

▲ 参集地のシンガポールで記念品の贈呈を受ける駒形管理官

▲ うーんっ!! SG活動にて

▲ マレイシアでの大歓迎の中

▼ 何作ってるの？タイの職業訓練所にて

◀ 太鼓は世界共通楽器

▶ 結構なお点前で。ホストファミリー代表を迎えて

▲ ホストファミリーと一緒に

▲ きっとまた会える

◀ 何を見て何を思ふ…

◀ 「天皇陛下御在位10年記念・東南アジア青年の船交流のつどい」で秋篠宮妃殿下をお迎えして